

本龍寺通信《番外編⑪》

和泉の本龍寺

検索

～ハッとしたとき出るエッセイ～



坊守のひとりごと



愛知県安城市和泉町中本郷41

2025年7月12日号

「奥さん、さすがだね」

数年前より^{けいついしょう}頸椎症、ぎっくり腰、^{ひざ}膝の痛みなどと付き合ってきました。そして今年2月、突然夜中に左膝の激痛に襲われて立つことも歩くこともできなくなり、とうとう車いす生活に。昔はあんなにつまらなかったお寺での生活が今では楽しくて、仕事が見える分忙しくて、なんてやりがいのある大事な場所に暮らせてもらっているのかと充実した日々を送っていたのに、です。

3月のある日、Yさんが「庭のつりがね草が咲いたから」と、ご自分で育てたお花を届けに来て下さいました。足を引きずって出ていった私を見て「奥さんも足が痛い？私も足も腰も頭も、あちこち痛くて調子が悪くて、ほんとに年を取るといいことがないよ！」としかめっ面をして言われるのです。

その途端、私にスイッチが入ってしまいました。一回り以上も年上のYさんにこう言ったのです。

「Yさん私はね、そういう年寄りにだけはなりたくないと思ってるよ。私も眠れないくらい膝が痛かったお陰で痛みなく眠れることがありがたいと思えるし、立てない歩けない時があったから足を引きずりながらも歩けることがありがたいし。本当に今まで当たり前だと思って暮らしてきたけれど、普通に動けることに今はすごく感謝できる自分がいるんだよ。」

するとYさんは次の言葉を。

「奥さん、さすがだね。やっぱりお寺に来て、聴かせてもらわないといけなよね。寒かったり腰が痛かったり頭が痛かったり、いろんな理由で^{しょうしんかい}正信会を休んでばかりだけど、これからまた頑張っ出てきますね。」



Yさんが明るい顔で帰って行かれてから、私の耳にこだましたのは「奥さん、さすがだね」のひと言でした。60過ぎのちょっとした初老体験を高飛車に語り、70代を生きるYさんの痛みや悲しみやつらさがまるで見えていなかった自分の小さく滑稽な姿が、その姿勢によって照らされたのでした。

本堂の掲示板に「自らの過ちを^は恥じ痛むことのみが、同じ間違いを繰り返さない道」とありました。「恥じ痛む」ためには自分より大きな存在に出会うこと。すぐに調子に乗ってしまう私の根性を、Yさんの謙虚な姿が「痛み」をもって知らしめてくださいました。この感覚を大切に、毎日の生活を送っていきたいと思います。

坊守 樋口頼子

あ
と
が
き

第81号をお届けします。現在は確実に「コロナ後新時代」になりました。葬儀や法事など今まで当たり前に行われていたことも、意義や大切さをきちんと伝えないと消えてしまう時代です。何百年続いたお寺でも、自己改革なしには生き残れないと肝に銘じています。〈頼〉